

通信小海

ゆとり教育

牧師 水草修治

今月から学校は毎週土日がお休みになる。いわゆる「ゆとり教育」の一環である。一方ではさかんに学生の学力低下が指摘され、ゆとり教育批判もされているのであるが、実施される以上、とやかくいふよりは、まずは積極的に「このことを受け止めて子どもの成長に役立てるの」が有益だと思う。

さて、「ゆとり教育」が目指している「この一」は、心を育てることだそうである。昔から少年非行はあったし、その件数は今よりむしろ多かったのであるが、それでも現在は少年非行の異常と残虐さが目立っようになっていることは事実である。そうしたことこそきつかけとなって

「今月のめざせ」

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」イザヤ書四三・四

知識偏重の詰め込み教育が批判されて、これからはゆとりを持たせて心の教育をすべきだということになったわけである。

では、心の教育とはなんだろう。それは人生観や世界観といった価値観にかんする教育ということの意味するのだろう。何が人として生きる上でいちばんたいせつなのかということ学ぶ。これは確かにたいせつなことである。

ところで、ずいぶん前だが、ヨーロッパと米国と日本で取ったあるアンケート結果を、比較文化論なる本で読んだことがある。親に対して「あなたは子どもに人生において一番たいせつなものは何であると教えていますか？」という質問をしたところ、ヨーロッパでは「自由」という答えが一番多かった。米国では「信仰」だったという。では、日本の親が人生でいちばん大切だと子どもに教えているのはなにか。なんと、カネであった。

日本同盟基督教団 小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 長野県南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

〒三八四一一 二二 二六七九二四七七六

郵便振替 五三 六一六八三

見晴台の教会へどうぞ

(小海駅東の丘の上)

地図

集会あんない

日曜日 朝礼拝 午前十時から十一時

夕礼拝 午後七時半から八時半

水曜日 祈り会 午後一時半と午後七時半

金曜日 賛美歌と聖書に親しむ会

第一第二金曜 午後七時半

第二第四金曜 午前十時

*個人的なご相談にも乗ります。

人生で一番たいせつなものがカネだと信じた子はカネのために友をかえりみない人になるだろう。カネが一番大事な子は病気がちな老親を捨てるだろう。カネがかかって仕方がないからである。

ゆとり教育が始まる時、親と教師はその生き方や価値観が問われることになるだろう。それはあなた自身が人生において実際に何を一番たいせつにして生きていくかが問われるときでもある。あなたはゆとり教育が始まる時、子どもや孫に人生において何が一番たいせつなのだと教えるのだろうか。

(律法学者のひとりがイエスに尋ねた。)
「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『われらの神である主は唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛せよ。』次はこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令はほかにありません。」 マルコ十二章

石焼き芋式床暖房の話

厳冬期いつでも皆さんをお迎えできるように、会堂に二十四時間床暖房をいれました。天井の高い礼拝堂は、ストーブでは暖めるのに時間はかかるし、「頭熱足寒」必定だからです。

導入したのは、土壌蓄熱放射式でサーマスタブといえます。安価な深夜電力で地中に蓄熱し、昼は余熱だけで二十四時間暖かい。石焼き芋に喩えれば、地面が石、人間がイモ。石焼き芋のように芯から暖まります。音も臭いもなく換気も無用、実に安全快適です。ポイラーがないので、数年ごとのポイラー交換も無用。一日中、人がいる家や店や施設なら経済的にもずいぶん助かると思います。

社長さん夫婦の人柄とサーマスタブが気に入ってしまって、頼まれもしないのに宣伝してしまいました。関心のある方は、夏になる前に体験しに来てください。

「賛美歌と聖書に

親しむ会」へどうぞ

第一第二金曜 午後七時半

第二第四金曜 午前十時

いつくしみ深き友なるイエスは罪とがうれいを取り去りたもう心のなげきをつつまず述べてなどかはおろさぬ負える重荷を

山谷に支援を

二月には九二七食を供給できました。感謝。米調味料(しょうゆ 塩 だし)の素)が必要です。お願いします。

小海町役場 九二二五二五

藤田寛 ヤマト運輸・台東支店止め(着店番

号三一 五)クロネコ宅急便で

カンパ 千振替 二四 四五三七九六

山谷農場

△子どもの成長△

娘の旅立ち

小学二年生の娘Sが転校することになった。

引越したので、校区が北牧小学校から小海小学校へ変わったためである。二年生とは言っても、保育園からずっとクラス変えもなく五年間いっしょに歩んできたお友だちと別れてしまつのはさびしがるつ、不登校になったらどうしようとり越し苦労までして、親としては心配した。

Sとふたりで聖書を開いた。信仰の父アブラム旅立ちの記事である。

主はアブラムに仰せられた。「あなたはあなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよつ。

あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろつる者をわたしはのろつ。地上のすべての民族はあなたによつて祝福される。」アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。アブラムがカランを出たときは、七十五歳であった。（創世記十二章）

「アブラムさんは神様の「命令があつたとき、どこに行くのかわからなかつたけれど、神様がアブラムさんの名を大いなるものとし、まわりの人たちもみんな幸せにしてください」という神様の約束を信じて、勇気を出してふるさとを出かけたんだ。そうしたら、実際、神様はアブラムもまわりの人たちも幸せにしてくださいました。・・・もし、Sちゃんがアブラムだったら、神様から旅立ちなさいという「命令を受けたらどうする？」すると、娘は「神様の言つとおりに出かけるよ。」と素直に答えた。

そこで私は内心、残酷だなあと感じながら言つた。「あのね、おとといお父さんは学校に行つて、校長先生に会つてきたんだ。そうして、Sちゃんは春から小海小学校に行

くことに決まつたんだよ。」娘の口からは言葉が出てこない。かわりに両目から涙があふれてつーつとほほを伝つた。抱っこして、神様がアブラムに語られたことばのアブラムという名のとこるにSという名を入れて何度も何度も読んでやつた。「Sの名は祝福となる。」と。少し落ち着くと娘は「神様、私はこれから転校することになりました。私はひとりですらいいのかわかりません。助けてください。」と祈つた。

小さな娘にとって、転校は生まれて初めての旅立ちである。危機である。不安である。けれども、この危機は神様がくださった成長のチャンスでもあるつ。

翌日学校で娘は自分から担任の先生に転校について話した。さつそく送別会の準備が始まつたという。帰宅して、娘は母親にこつ言つた。「なんでも自分のしたいようにだけ祈つてもだめなんだね。」娘は人生について、神のみむねに従つというこについて、一つたいせつなことを学んだらしい。

それはそうと、北牧小学校のみなさんありがとうございました。小海小学校のみなさんよろしく願ひします。

親子上映・お話会

たいせつなきみ

マックス・ルケード作

四月二日(土)午後一時半

場所：小海キリスト教会会堂

昨年来、日本とアメリカで静かなブームになっている絵本にマックス・ルケード『たいせつなきみ』があります。これが映像化されましたので、教会で上映することにしました。

この作品は、大人も子どもも胸があったかくなります。「読むうちに涙がとまらなくなり、自分の子育てについて、考えさせられた。」という感想を聞きました。

作品としては三十分ほどのものです。「親子上映会」としましたので、お子様連れでもお一人でも安心してお越しください。ここにそのさわりを紹介しておきましょう。

ウイミックスという、ちっちゃな木のこびとたちがいた。みんな、エリという、ちょうこくかが、ほったんだ。エリのしこばは、こびとの村を見おろすおかのてっぺんにあった。

ウイミックスはみんな、いろんな、かっこうをしていた。おつきな、はなをしたのに、おつきな、目をしたの。のっぽくんに、おちびさん。ぼうしをかぶったのに、うわぎをきたの。でも、みんな、ひとりの、ちょうこくかに、つくられて、同じ村にすんでいた。そして毎日、朝から、ばんまで、同じことをしていた。シールをくつつけあうんだ。ウイミックスは、みんなきんぴかのお星さまシールと、みにくい、はいいろの、だめじるしシールをべつべつの、はこにいれてもっていた。こびとたちは、町じゅうどこでも、とおりのあちこちで、お星さまとだめじるしを、くつつけあって、くらししていたんだ。

つるりと、なめらかな木でできて、えのくもきれいにぬられた、かわいいこびとたちは、いつもお星さまを、もらっていた。でも、木がでこぼこだったり、えのぐがはが

れていたら、だめじるしをくつつけられるんだ……

お星さまだらけの、ウイミックスとうじよう！お星さま、もらうと、気分はさいこう！またすごいことして、お星さまがほしくなってくるんだ。

「だけど、なんにもできない、ぶきつちよなこびともいた。そんなこびとたちは、みにくい、だめじるしをくつつけられたんだ。パンチネロは、そんなこびとのひとりだった。……ある日、パンチネロは、ウイミックスらしくないウイミックスに出会った。お星さまも、だめじるしも、つけていないんだ。木のまんまだった。名前をルシアといった。みんなルシアにもシールをくつつけおうとしたけど、つかなくったんだ。

「ぼくもあんなふうになりたいなあ」とパンチネロは思った。「もうだれからも、いいとかわるいとか、言われたくないよ。」それでシールのつかないあの子に、どうすればいいかを聞いてみた。「それなら、かんたん」とルシアが答えた。「毎日、エリに会いに行くのよ。」「エリっ、」そう、エリよ。ちょうこくかのね……」

つづく